

既存展示の魅力を拡張するデジタル技術

—環境省箱根ビジターセンター—

株式会社 乃村工藝社 プランニングディレクター 吉田雅之

一. はじめに

DX（デジタルトランスフォーメーション）推進のもと、新たなデジタル技術を活用したツールや表現手法などが、日常生活の中に広まり、それらが当たり前のように利用されていく状況が進展している。展示においても、最新デジタル技術等を踏まえ、新たな展示手法の開発や技術の応用などが行われてきており、利用者にとってVR（バーチャル・リアリティ）やAR（アグメンテッド・リアリティ）などを用いた展示インターフェイスは、以前にも増して身近なものとなってきた。新たなデジタル技術を活用することで、かつては表現できなかったことが可能となり、今まではない展示効果を得ることもつながっている。これは既存展示もつ展示効果を活かしつつ、それを

さらに増大・拡張することも可能であることを意味する。

展示改装にはその方法にいくつかのパターンがあると思われるが、中でもデジタル技術を表示に付加することで、既存展示の本来の役割や展示効果を活かしたまま、展示全体の効果を増大・拡張する展示改装について、環境省箱根ビジターセンターを事例に紹介したい。

二. 運営活動との連動

環境省が進めている「国立公園満喫プロジェクト」の一環として、箱根ビジターセンターの展示改修が行われたが、機能強化のポイントは以下の三点である。①「多言語対応」および「デジタル技術」の観点からの充実、②上質で居心地のよい滞在空間創出のための工夫、③自然ふれあい活動を含めた利用拠点としての機能の充実。これらをもと

に、インバウンド対応も踏まえ、箱根地域の魅力をより顕在化し、情報発信機能の充実を図る施設として展示改修が進められた。

また、箱根ビジターセンターの基本理念には、ビジターセンターの重要な役割である、利用者を自然へ誘導する、自然の状況を伝える、自然教育活動・自然情報活動を行うことが定められている。同施設は平成一九年にリニューアルオープンしているが、この度の令和二・三年度のリニューアルは、さらにそのリニューアル後の施設利用状況、現状および関係機関等における取り組み状況、運営活動等を踏まえての展示改修となっている。運営活動は環境省、（一財）自然公園財団箱根支部、箱根パークボランティアにより行われており、企画展や自然観察会など、年間を通して数多くの魅力的な活動が行われているビジターセンターである。改装にあたっては、容易な展示替え、イベント時の展示活用など、さらなる充実した運営活動を支援するものとした。

三. 事例一

対象へのまなざしの変化

展示コーナー「箱根生き物の森」は箱根の四季を紹介している。

その中心となる四季の絵画は、箱根の自然の魅力を特徴のある自然景観とともに季節ごとに描いており、来館者に四季を通じた箱根の素晴らしさを伝えている。箱根の四季の自然、動植物の世界が描き込まれた絵画は利用者から人気も高い。四季の絵画と対応するかたちで、その下では各季節ごとの生物を写真や実物等で紹介している。このコーナーの展示は、解説や説明など情報を提供することよりも、驚きや新たな発見など、自然への興味関心を促すきっかけとして位置付けられている。展示改装にあたっては、既存の四季の絵画を活かしつつ、より利用者の興味を引く展示とすることが目標となった。絵画はある瞬間が描かれたものであり、例えばその前後の動き、時間的な推移の中で変化する自然のうつろいは、見る者の想像に委ねられている。改装にあたっては、ARを活用し、絵画に描かれている生物に動きを与えることで、四季の絵画をより楽しんでもらえるものとした。四季の絵画に描かれた特定の生物にタブレットをかざすと、生物がマーカーの役目をして、AR動画が起動し、鳥の鳴き声や風の音など、四季を感じさせる環境音とともに、生物の動きを楽しむこと



タブレットの生物の動きは、季節を感じさせる環境音とともに楽しむことができる。

山のなりたち」は、箱根全体を俯瞰できるジオラマである。ボタンを押すと対象ポイントが点灯するハイキングコースや、箱根の山々の歴史解説等がある。目指す場所のイメージをつかみやすいとのことから、利用者に人気がある。運営側においても、ジオラマは団体見学での説明をはじめ、利用者からの質問に答える際には、活用しやすいという。

ができる。展示解説は多言語選択（日、英、簡、繁、韓）が導入されているが、ARの生物の動きは視覚的に状況が理解できるように、言語を介さず、驚きを表すエクスクラメーションマークや獲物のシルエット等を表示している。

自然の姿をよく見てもらう、新たな発見をすること、発見する楽しさを体験してもらうことを促す展示として、四季の絵画の見方の変化のみならず、利用者がフィールドに出かけた時の、自然へ向ける視点や興味関心の変化が生まれるものとなっている。

四. 事例二

インターフェイスの拡大

展示コーナー「箱根の地形と火

展示改装にあたっては、ジオラマをそのまま残して活かしつつ、デジタル技術を導入することで、ジオラマを前にした利用者のさらなる興味関心を喚起し、箱根のフィールドへと誘うことが目標となった。

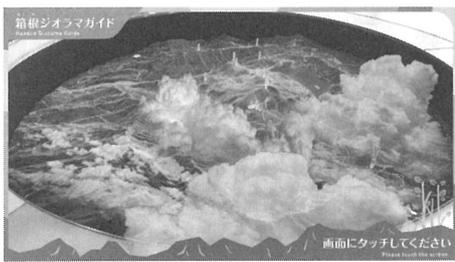
ジオラマは空間的位置情報の紹介、ある地点の写真等と紐付けて紹介する場合など、位置情報との親和性が高い展示物である。ジオラマへの新たなインターフェイスとして、情報検索装置を付加し、新たなテーマやさまざまな情報をジオラマに重ね合わせることで、ジオラマを多角的に活用するものとした。

箱根の四季のうつろいを感じさせる待機画面演出に始まり、ジオラマ周りの造山活動断面グラフィックの内容に合わせるかたちで、現在へと至る箱根の造山活動をジ

ジオラマに重ね合わせ、視覚的に造山運動の全体像を把握できるようにしている。また、ハイキングコース案内、山々の紹介、富士山ビューポイント、温泉地、国立公園の範囲および保護地域区分表示など、ジオラマと重ね合わせた状態で情報を得ることができる。

ディスプレイ上でジオラマに重ねられたポイントを選択することにより、山々からの眺望や、温泉場の紹介など、その場を訪れたくなる魅力的な情報にアクセスできるようにしている。これらの検索により、提示される画像やテキストは、ジオラマの地形と現地ポイントと相まって、現地情報のリアリティを増大している。運営者が容易に画像やテキストを更新できるCMS（コンテンツ・マネジメント・システム）も一部取り入

れ、既存ジオラマを活用した検索装置の導入により、今まで以上に多彩な視点から、利用者をフィールドへと誘うことが具



待機画面では雲の流れや紅葉など四季のうつろいを表示し、検索装置の利用を促している。

現化された。

五. おわりに

環境省箱根ビジターセンターは、運営活動が活発であり、その活動は利用者が常に楽しみながら箱根の自然へと誘われる工夫に満ちている。ビジターセンターは、一歩外に出れば豊かな自然が周囲にあるが故に、何を利用者に提供するかが重要であるが、この度の改装にあたっては、オープン当初から蓄積されてきた来館者の反応や要望、そして日々利用者と接する運営者の意見が重要なよりどころとなった。

箱根ビジターセンターの二回目となる大きな展示リニューアルは、展示との接点のみならず、展示効果そのものを増大・拡張させることにつながったと考える。デジタルに限らず、新たな展示技術の導入により、今後も既存展示物の良さを活かして補強し、さらには拡張していく展示リニューアルに携わって行きたい。

吉田 雅之 ● よしだ まさゆき

ビジターセンターの他、ミュージアムに関する調査、構想、計画、展示設計・施工、運営、さらに運営委託業務先での学芸員業務など、施設づくり全般に携わっている。

<https://www.nonmukougougei.co.jp/>